

英国の留学生獲得戦略

ロンドン研究連絡センター

安藤 光子

1. はじめに

ーグローバル化ー近年世界がこの流れの中に急速に放り込まれ、大きな変革が迫られている。この波はビジネス界だけではなく、大学にも押し寄せ、学生や教員・研究者の国際的流動性が急速に高まる中、語学教育の強化、連携プログラムの実施、大学間ネットワークの構築、海外からの留学生受入れや日本人学生の海外留学の増加のための取組み等が行われている。

筆者はこの「大学のグローバル化」の中でも「海外拠点の活用」に以前から興味を持っていた。というのも、所属する名古屋工業大学や研修先の日本学術振興会において米国やインド等の海外拠点を訪問する機会をいただいたこと、また、名古屋工業大学がグローバル展開・情報収集・優秀な人材確保を目的とし、第3番目となるヨーロッパ事務所を2013年7月に創設¹し、その開所式に参加する機会をいただいたこと、さらには、現在自身が海外拠点に勤務していることから、海外拠点をどう有効に活用すべきかについて日頃から考えていたことによる。

しかし、調査を進めていく中で、英国の大学の海外拠点は日本の海外拠点と同じ役割（情報収集や研究サポート、海外広報等）も有するものの、それ以上に、留学生獲得に特化している拠点多いことが判明した。さらにそれは、英国では、高額な授業料を納める留学生は英国経済を支える顧客として捉えられ、戦略的に留学生獲得が行われているという現状が影響していることを知った。

日本では、2013年6月に閣議決定された「日本再興戦略」²において戦略的な外国人留学生の確保を推進することが明記された。それを踏まえ、2013年12月18日、戦略的な留学生交流の推進に関する検討会で「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略」（報告書）³が取りまとめられた。そこには重点分野・地域や戦略実現のための具体的な方策が記されている。世界的な留学生獲得競争が激化し、日本の更なる発展を目的とした戦略の策定が必要とされる中、すでに戦略的に留学生受入れを推し進めている英国の状況を学ぶ意義は大きいと考えた。また、戦略的というと留学生の数値目標達成のみに終始しているのではないかという個人的な印象もあり、その点についての興味もわいた。

そこで、今回の研修報告書では、「英国における留学生獲得戦略」をキーワードに、中でも、英国の高等教育がターゲットとする重点国・地域、及び日本では珍しい、留学生獲得に重要な役割を担っている留学エージェント（以下、エージェント）の活用を焦点をあてまとめることとした。

¹ 2011年中国・北京化工大学内に海外事務所を創設したのを皮切りに、2013年にはマレーシア・マラ工科大学内にも開設した。
<http://www.nitech.ac.jp/int/office.html>

² 「日本再興戦略」2013年6月14日 http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf

³ 「世界の成長を取り込むための外国人留学生受入れ戦略」2013年12月18日 重点地域として（1）東南アジア（ASEAN）（2）ロシア及びCIS諸国（3）アフリカ（4）中東（5）南西アジア（6）東アジア（7）南米（8）米国（9）中東欧が挙げられている。具体的方策として、留学コーディネーターの配置等による戦略的な外国人留学生の受入れ、奨学金の充実と運用改善等が明記されている。
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2013/12/24/1342726_2.pdf

2. 英国における留学生獲得について－重点国・地域を中心に－

(1) 世界における英国の教育産業の位置づけ

ヘルスケア産業に次ぎ第2の市場である教育産業⁴。その中でも「英語教授」は「教育工学」と並び最大の成長市場であると言われている⁵。さらに、世界の留学生数も1975年の80万人から2011年には430万人へと大幅に増加する等⁶、教育の流動性が高まっている。このような状況の中、「home of English」⁷として君臨する英国は、「英語圏/英語学習の場」として世界の学生にとって魅力ある留学先となっている。

「Patterns and trends in UK higher education 2012」⁸に掲載されている「Trends in

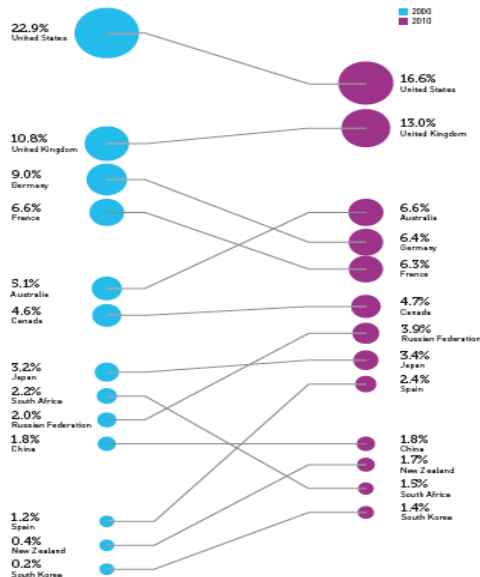


図 1

Trends in international market shares, 2000 and 2010

international market shares, 2000 and 2010」 (図

1)によれば、英国が占める留学生市場は2000年に10.8%であったのが、2010年には13.0%に拡大している。一方、2000年22.9%を占めていた米国は2010年も変わらず首位を占めるものの、16.6%と減少し両国の差は僅かになっている。また、オーストラリアは第5位から第3位に上昇している。この3カ国は「英語圏/英語学習の場」という共通キーワードで競争関係にあり比較されることが多く⁹、今後も熾烈な人材獲得競争が続くのは間違いない。

⁴ Alpen Capital 「GCC Education Industry」 2010年9月19日 <http://alpen-capital.com/includes/GCC-Education-Industry-Report-September-2010.pdf>

⁵ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月 https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

⁶ OECD 「Education at a Glance 2013」 <http://www.oecd.org/edu/eag2013%20%28eng%29--FINAL%2020%20June%202013.pdf>

⁷ 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」内で英国をこのように描写している。 https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

⁸ Universities UK 「Patterns and trends in UK higher education 2012」

<http://www.universitiesuk.ac.uk/highereducation/Documents/2012/PatternsAndTrendsInUKHigherEducation2012.pdf>

⁹ HSBCの調査では、この3カ国の中で英国での留学費用(学費・生活費)が最も安い。

<http://www.hsbc.com/news-and-insight/2013/study-costs-most-in-australia>

2013年7月29日、英国のビジネス・イノベーション・技能省（BIS: Department for Business, Innovation and Skills）は、英国経済に大きく貢献している教育産業をさらに拡大させる

「International Education Strategy（国際教育戦略）」を発表した¹⁰。その中で、保険・コンピュータ情報産業より大きく、第5位の輸出産業である教育産業の英国経済への貢献額は上昇しており、そのうちの75%以上が、英国で学ぶ留学生によって支払われた授業料・生活費に起因すると算定されている¹¹。この戦略には「今後5年間で英国大学への留学生の20%（約9万人）増加を図る」という目標も定められており、今後も英国の高等教育において留学生獲得が大きなビジネスであるという傾向は続いていくであろう。

表1
Key UK markets for higher education/UK presence, 2011/2012

Current importance to UK								
UK Priority Countries	Importance as a source country for UK student recruitment (2011/12)							
	a) Study in UK			b) Study via TNE (excluding Oxford Brookes)				
	Country and position	No of Students	No of UK HEIs	Country and position	No of Students	No of UK HEIs		
China	China	1	78,715	152	Malaysia	1	45,425	66
India	India	2	29,900	153	Singapore	2	31,920	82
Brazil	Nigeria	3	17,620	143	Gulf*	2a	28,150	81
Saudi Arabia	Malaysia	7	14,545	143	China	4	18,045	67
Gulf	Saudi. A	12	9,860	131	Saudi. A	12	8,555	54
Turkey	Gulf*	12a	8,525	143	India	13	7,520	69
Mexico	Thailand	16	6,235	133	Russia	15	5,890	46
Indonesia	Singapore	21	5,290	135	Nigeria	16	5,045	52
Colombia	S. Korea	23	4,560	139	S. Africa	22	3,470	57
	Vietnam	27	3,785	120	Vietnam	27	2,885	34
	Russia	28	3,655	133	Thailand	51	685	39
	Turkey	33	3,350	129	S. Korea	56	555	31
	Mexico	50	1,555	119	Indonesia	75	280	31
	S. Africa	57	1,350	141	Brazil	70	330	32
	Brazil	58	1,340	132	Turkey	77	280	35
	Indonesia	53	1,450	116	Mexico	83	215	29
	Colombia	71	925	112	Colombia	95	145	24
	Chile	78	680	87	Chile	123	70	18

N.B. Shaded areas show the UK's current priority countries
* Importance of student recruitment to UK and current rank against other UK sources, based on 2011/12 data.
** The Gulf is shown as illustrating the combined position of the following countries – Bahrain, Kuwait, Oman, Qatar and United Arab Emirates (including Saudi Arabia)

（2）英国高等教育における重点国・地域

英国高等教育の場で学ぶ留学生の出身国（EU域外）は、約26%を占める中国を筆頭にインド・ナイジェリアと続く（2011/2012年）¹²。英国の国際的地位を高め、教育活動による収益を増やす等の目的で、前述の戦略では、重点国・地域を具体的な国名を挙げ表¹³のとおり定めている。以下にこの表で挙げられている、中国・インド・ブラジル・サウジアラビア・Gulf地域（バーレーン、クウェート、オマーン、カタール、アラブ首長国連邦）・トルコ・メキシコ・インドネシア・コロンビアについて、各国・地域の昨今の留学生に関する状況をまとめる。英国は留学生獲得のため、多くの留学生を受け入れ、既に強い結びつきがある中国とインドに加え、若年層人口が増加し、教育に投資している、すなわち、

¹⁰ BIS 「New push to grow UK's £17.5 billion education exports industry」 2013年7月29日 <http://news.bis.gov.uk/Press-Releases/New-push-to-grow-UK-s-17-5-billion-education-exports-industry-690a3.aspx>

¹¹ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月 https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

¹² HESA Student Record 2010/2011, 2011/2012 「Top ten non-EU countries of domicile in 2011/12 for HE students in UK Higher Education Institutions」 http://www.hesa.ac.uk/index.php?option=com_content&task=view&id=2663

¹³ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月 https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

潜在的に多くの留学生を送り出す可能性を持つ国・地域を重点とする動きが見て取れる。

(a) 中国

英国にとって最大の留学生送り出し国である中国では、大学数を上回る高等教育進学者の増加や中流階級の増加等により、海外に進学の間を求める学生が増加している。しかし、今後 18-24 歳の人口が減少すると見られ、また、米国・オーストラリアとの熾烈な競争もあり、英国留学をする中国人学生の増加傾向は当然のことではなくなると指摘されている¹⁴。

(b) インド

英国でのインドからの留学生数は 2010/11 年と比べ 2011/2012 年には約 24% 下降している¹⁵。この原因としては、ビザの規制強化¹⁶やポンドに対するルピー安¹⁷の影響が指摘されている。とはいえ、英国でのインド人留学生数は米国に次いで第 2 位¹⁸であり、インドの留学希望者にとっては人気の留学先といえる。

(c) ブラジル

ブラジルの留学生は米国、フランス、ポルトガル、ドイツ、スペインの順に多く¹⁹、英国は上位に挙がっていない。しかし、ブラジル政府が実施する **Science Without Borders Scheme** (10 万 1,000 人の学生を海外の大学に送るプログラム) により、英国は 2012 年 9 月から 4 年間でブラジルから最大 1 万人の学生を受け入れる見込みである²⁰。

(d) サウジアラビア及び Gulf 地域—中東地域—

中東地域では、爆発的な人口増加と女性の高等教育への進出に伴い、教育の受け皿の増加が必要となっている²¹。前述の「**Patterns and trends in UK higher education 2012**」にある「**Change in total non-EU student numbers studying at UK HEIs by region of origin between 2002-03 and 2010-11**」によれば、2010/2011 年の中東からの留学生は 2002/2003 年と比べ 120% 増加している。これは、アジア (80%)、アフリカ (51%)、オーストラレーシア (14%)、南米 (1%)、北米

¹⁴ Universities UK 「The UK's relationship with China: Universities」 2013 年 11 月 6 日

<http://www.universitiesuk.ac.uk/highereducation/Documents/2013/UKandChina.pdf>

¹⁵ HESA Student Record 2010/2011, 2011/2012 「Top ten non-EU countries of domicile in 2011/12 for HE students in UK Higher Education Institutions」 http://www.hesa.ac.uk/index.php?option=com_content&task=view&id=2663

¹⁶ Times Higher Education 「'Alarming' drop in students from Indian subcontinent」 2013 年 1 月 11 日

<http://www.timeshighereducation.co.uk/422359.article>

¹⁷ Times Higher Education 「Indian students may be priced out of UK by falling rupee」 2013 年 9 月 12 日

<http://www.timeshighereducation.co.uk/news/indian-students-may-be-priced-out-of-uk-by-falling-rupee/2007238.article>

¹⁸ UNESCO Institute for Statistics 「Global Education Digest 2012/Opportunities lost: The impact of grade repetition and early school leaving」

<http://www.uis.unesco.org/Education/GED%20Documents%20C/GED-2012-Complete-Web3.pdf>

¹⁹ UNESCO Institute for Statistics 「Global Education Digest 2012/Opportunities lost: The impact of grade repetition and early school leaving」

<http://www.uis.unesco.org/Education/GED%20Documents%20C/GED-2012-Complete-Web3.pdf>

²⁰ <http://international.ac.uk/member-services/partnerships/science-without-borders.aspx>

²¹ ICEF Monitor 「Continuing expansion for education in the Middle East」 2013 年 3 月 21 日

<http://monitor.icef.com/2013/03/continuing-expansion-for-education-in-the-middle-east/>

(32%)、EU 以外のヨーロッパ (-9%)²²の他地域と比較しても顕著な増加である。

(e) トルコ

British Council の調査報告書²³によれば、トルコは 2023 年までに世界の 10 大経済国のひとつになることを目指し、教育や研究、イノベーションに多額の投資を行っているという。また、トルコの学生の 95%は海外で勉強したいと考えており、さらには、調査回答者の 96%が海外で教育を受けることが将来の雇用を保証すると信じているという。トルコは EU 諸国と比べ若年層の割合が多く²⁴、その多くが留学を選択する可能性は高い。

(f) メキシコ

メキシコの留学生の半数以上は米国に進学している（英国は第 5 位）²⁵。メキシコを含む南米地域ではこの 10 年間で 5,000 万人以上の社会的地位が向上し、子女に最良の教育を与えたいと望む人が多くなったこと、また、メキシコ地方政府が高等教育への低い進学率に目を向け始め、奨学金や助成金等を整備した結果、高等教育へ進学する人が増加したことが、留学への意欲拡大につながったと指摘されている。犯罪率の高いメキシコでは英国は安全な国であると認識されており²⁶、英国への留学生の増加が見込まれる。

(g) インドネシア

インドネシアの留学生は、オーストラリア、マレーシア、米国、日本、ドイツの順に多い²⁷。2012 年 11 月、英国政府とインドネシア政府は両国の教育関係をより緊密にする共同枠組み協定に調印した。この協定には、両国の高等教育機関のパートナーシップに加え、新しいプログラムである DIKTI（毎年 150 人のインドネシア人研究者を英国の大学に送るプログラム）も盛り込まれ、知識移転や学生の流動化の促進が見込まれる²⁸。

(h) コロンビア

コロンビアでは、歴史的に、政府や社会が能力のある者に海外の高等教育機関で勉強するための財政援助を行ってきた²⁹。コロンビアからの留学生は、米国を筆頭に、スペイン、フランス、ドイツ、

²² Universities UK 「Patterns and trends in UK higher education 2012」

<http://www.universitiesuk.ac.uk/highereducation/Documents/2012/PatternsAndTrendsInUKHigherEducation2012.pdf>

²³ British Council 「The importance of international education: a perspective from Turkish students」

<http://ihe.britishcouncil.org/educationintelligence/importance-international-education-perspective-turkish-students>

²⁴ Turkish Statistical Institute 「Youth in Statistics, 2012」 <http://www.turkstat.gov.tr/PreHaberBultenleri.do?id=13509>

²⁵ UNESCO Institute for Statistics 「Global Education Digest 2012/Opportunities lost: The impact of grade repetition and early school leaving」

<http://www.uis.unesco.org/Education/GED%20Documents%20C/GED-2012-Complete-Web3.pdf>

²⁶ The Guardian 「Mexican students eye up UK universities as study destination」 2013 年 6 月 24 日

<http://www.theguardian.com/higher-education-network/blog/2013/jun/24/latin-america-international-student-growth>

²⁷ UNESCO Institute for Statistics 「Global Education Digest 2012/Opportunities lost: The impact of grade repetition and early school leaving」

<http://www.uis.unesco.org/Education/GED%20Documents%20C/GED-2012-Complete-Web3.pdf>

²⁸ BIS 「UK and Indonesia strengthen their relationship with nine new higher education partnerships」 2012 年 11 月 1 日

<http://news.bis.gov.uk/Press-Releases/UK-and-Indonesia-strengthen-their-relationship-with-nine-new-higher-education-partnerships-68294.aspx>

²⁹ OECD 「Reviews of National Policies for Education/Tertiary Education in Colombia」

<http://www.oecd.org/edu/Reviews%20of%20National%20Policies%20for%20Education%20Tertiary%20Education%20in%20Colombia%202012.pdf>

オーストラリアの順に多く³⁰、英国は上位に挙がっていない。この状況の中、2013年4月、英国 David Willetts 大学・科学担当国務大臣が英国高等教育の認知度高上のため、メキシコとともに、コロンビアを訪問している。同大臣は、メキシコやコロンビアのような新興経済国からより多くの学生を引きつけることは、将来的には、英国人学生の交流や共同研究といった別の連携につながると述べており³¹、英国がコロンビアとの関係を重視していることがうかがえる。

3. 英国における留学生獲得について－エージェントを中心に－

(1) エージェント以外の留学生獲得について

日本の大学で行われている主な留学生獲得の手法としては、ホームページや大学の海外拠点の活用、独立行政法人日本学生支援機構や日本の大学、また、現地機関等が中心になり開催する海外留学フェアや留学説明会、現地の学校への直接訪問等が挙げられる。

英国においても同様の方法で行われているが、個人的な印象ではあるが、わかりやすく親しみやすいものになっている。例えば、大学のホームページでは **International** のページを訪れると、国毎のページが設けられており、出身学生の経験談やインタビュー動画、その国の学生向けプログラムに関する情報等が容易に得られる。多言語対応（中国語・日本語・アラビア語・ポルトガル語・スペイン語・トルコ語等）されているところも多く、情報量も多い³²。また、顔の見える形で直接情報を得られる機会となる現地訪問は、ほとんどの大学が訪問日程をホームページ上に掲載し、いつでも大学職員とコンタクトできるか明確になっている。

(2) エージェント利用について

英国の大学ではその他にも留学生獲得においてエージェントが重要な役割を果たしていることが前述の戦略の政府文書「**International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying**

³⁰ UNESCO Institute for Statistics 「Global Education Digest 2012/Opportunities lost: The impact of grade repetition and early school leaving」
<http://www.uis.unesco.org/Education/GED%20Documents%20C/GED-2012-Complete-Web3.pdf>

³¹ BBC 「Ministers to woo Latin American students」 2013年4月22日 <http://www.bbc.co.uk/news/education-2222582>

³² 「外国人学生の日本留学へのニーズに関する調査研究」（2008、2009年度文部科学省先導的の大学改革推進経費による委託研究、横田）内の調査によれば、日本留学情報の入手先はホームページが最も多いという。この調査は、日本にいる日本語学校生へ「日本広報センター」「日本留学説明会・留学フェアで」「留学代理店で」「ホームページで」等12項目の中から、情報入手先を尋ねたもの。半数近くの学生がホームページで情報を得ていた。留学生獲得にはホームページの充実が必要であろう。

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yokotam/publications%20rp%205.html>

Analytical Narrative」³³に明記されている。エージェントとは、留学を希望する学生に、留学に関する情報提供やカウンセリング、種々の手続き（申請書作成、航空券手配、ビザ申請、留学前オリエンテーション等）のサポート等を行う業者である。大学との連携はかなり大きく、2011/2012年、英国の大学に進学した約30万人の留学生（EU域外）のうち、4割近くがエージェントを通じて留学しており、大学が支払った手数料は1億2,000万ポンドにのぼると報じられている³⁴。英国の大学は学生数に応じた歩合制で手数料（一般的に初年度授業料の10%前後）を支払う個別契約を締結している³⁵一方、学生側もエージェントに手数料を支払う場合もある。エージェントは世界各国に広がり、英国だけでなく、同じ英語圏であるオーストラリア・カナダ・ニュージーランド・米国・アイルランドによる利用が急速に伸びている³⁶。

このエージェント利用は大学側・学生側双方にそれぞれメリットがある。十分な予算や人員がない大学にとって、コスト効率の高い手法である³⁷。海外拠点のような設置費や管理費は必要でなく、国が違うことから生じる税務上・人事上の問題等も考慮しなくてよい。また別の国での留学生受入れを戦略として掲げることになっても、その国のエージェントを活用することで、変化にも迅速に対応できるであろう。

他方、学生側にとっては、高額な費用がかかり、人生を左右するであろう留学には慎重な選択が必要である。複数国の複数大学を取り扱うエージェントを利用することで、多くの情報を比較しながら吟味でき、自分に適した進路先を選択することができる。さらに留学が決まった後も、知識もなく時間もかかる種々の手続きをサポートしてくれるのは大きな助けになる。

大学のホームページには、担当部署や海外拠点、卒業生や British Council とともに、エージェントの連絡先が並び、その国の Local representative や Official representative、Educational Advisor 等と表現されている。エージェント利用率が高い中国やインドでは、何十社ものエージェントの連絡先が並び、かなり浸透していることがうかがえる。

³³ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

³⁴ The Daily Telegraph 「Foreign recruitment agents 'paid £120m' by universities」 2013年7月29日
<http://www.telegraph.co.uk/education/educationnews/10207365/Foreign-recruitment-agents-paid-120m-by-universities.html>

³⁵ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

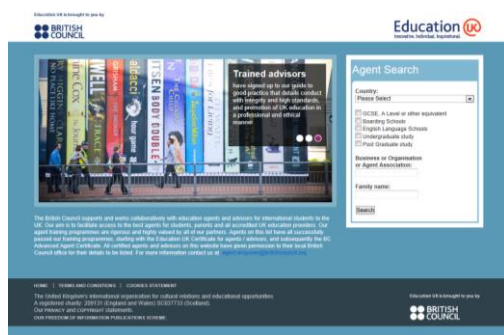
³⁶ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

³⁷ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

(3) エージェント利用の問題点及びその対策

2012年6月、中国のエージェントを使い英国の大学に入学した学生が、英国人学生が入学に必要な成績（Aレベルの試験で少なくともA,A,Bが必要）に満たない成績で入学していたことが報じられた。このエージェントは英国の20以上の大学のOfficial agentであり、中国のRepresentativeとなっていたという³⁸。

前述の「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」ではエージェントの重要な役割とともに問題点にも言及しており、高い英国高等教育の評判は、不道德なエージェント—例えばビザ取得のためのうまいやり方を助言する、不正に出願書類を作成する等—が引き起こすリスクに直面している³⁹という。Times Higher Educationの調査⁴⁰によれば、何人の学生が手数料を支払い入学しているか、7割近くの大学は認識していない等、エージェントの活動を十分に把握できていない大学もある現状も垣間見える。



British Council のデータベース

英国ではエージェント利用について規制は行っていないが、上記のリスクを回避するため、大学・国レベル双方で危機管理を行っている。大学レベルでは個別契約や緊密な関係構築によりエージェントを管理する一方、国レベルではBritish Councilが英国高等教育制度やビザ等についての研修プログラムを実施している⁴¹。

2013年11月にはBritish Councilがエージェントのデータベース（上記）をホームページに公開した⁴²。ここに掲載されているエージェントはBritish Councilのプログラムを受講し、さらには、倫理規範に同意し、定期的な評価を受けることが義務付けられている。このデータベースは誰もが利用でき、エージェント側も自己の信頼性を示せる一方、大学や学生側も信頼できるエージェントを探す有用なツールとなることが期待できる。

³⁸ The Daily Telegraph 「How foreign students with lower grades jump the university queue」 2012年6月26日

<http://www.telegraph.co.uk/education/universityeducation/9357875/How-foreign-students-with-lower-grades-jump-the-university-queue.html>

³⁹ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

⁴⁰ Times Higher Education 雑誌 「Grand fee paid for each foreign student」 2012年7月5日

⁴¹ HM Government 「International Education – Global Growth and Prosperity: An Accompanying Analytical Narrative」 2013年7月

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/229845/bis-13-1082-international-education-accompanying-analytical-narrative.pdf

⁴² <http://www.bcagent.info/gal/>

4. 大学でのインタビュー調査

これまで、英国の留学生獲得における重点国・地域やエージェント利用について紹介してきた。本章では、各大学が実際どのように留学生獲得を行っているか、関係者からインタビューした内容を紹介する。インタビューを行うにあたり、かなりの数の大学に依頼を行ったものの、大学の国際戦略に関わるセンシティブな内容であるためインタビュー不可となった大学もいくつかあった。このような中、さらには、通常業務で多忙な中、親切に対応して下さった大学関係者、また、インタビューのアポイントをサポートして下さった皆様にこの場を借り御礼を申し上げたい。なお、インタビューのコメントは、各大学担当者の意見や言葉によるものが大きく、大学としての意見ではないことをあらかじめご了承ください。

(1) アバディーン大学 (University of Aberdeen)

スコットランドのアバディーン市にあるアバディーン大学は、スコットランドでは3番目に長い歴史のある大学である。学生数は約14,000名で北海油田と結びついた石油関連研究も盛んである。120カ国以上の国から留学生を受け入れており、大学の戦略「Strategic Plan 2011-2015」には目標値とともに留学生数を増加させることが掲げられている。海外拠点を持たず、留学生のリクルートはホームページや現地訪問、エージェント等により行っている⁴³。

○インタビュー日時及び場所：2013年12月3日、アバディーン大学

○対応者：Jenny Fernandes氏 (Head of International Office)

- ・留学生獲得は、数の増加のみを重視するだけでなく多様性を重視し、幅広い国からの留学生受入れを進めている。英国に留学する学生の多くは、英国での経験に加え、国際的な経験を持ちたいと考えており、少数国に偏ることなく、バランスが重要であると考えている。国際的に大きな市場である中国・ナイジェリア・米国とともに、石油関連研究が盛んであるアバディーン大学は、石油資源が豊富で石油産業が盛んな、カザフスタン・アゼルバイジャン・中東諸国・ガーナとも結びつきが強い。
- ・エージェントを利用するかは国（市場）の状況—例えば、米国の学生はあまりエージェントを使っていない、中国やインドではエージェントの利用率が高い—による。エージェントが行っている業務も国（市場）によって異なる。タイには、スコットランドの大学への留学専門のエージェントがある。
- ・新規の国での留学生獲得を行う際、現地情報把握のため現地調査を行っている。
- ・エージェントは大学の代表として活動してもらうことになり、エージェントの職員に、大学やアバ

⁴³ 内容は大学ホームページをまとめた。<http://www.abdn.ac.uk/>

ディーンでの生活に対する理解を深めてもらうため、年1回あるいは2年に1回程度、大学に研修に来てもらっている。

(2) ノッティンガム大学 (The University of Nottingham)

ラッセルグループのひとつであるノッティンガム大学は、英国以外にも、中国の寧波（2004年設置）、マレーシアの Semenyih（2000年設置）にキャンパスを構えている。1881年創設で学生総数は43,561人。うち約2割の学生が中国とマレーシアのキャンパスに在籍している。また、150以上の国から留学生を受け入れている。中国、インド、マレーシア、ブラジル、メキシコ、ガーナに海外拠点が設置されており、エージェントとともに留学生獲得に大きな役割を担っている⁴⁴。

○インタビュー日時及び場所：2013年10月23日、JSPS ロンドン研究連絡センター

○対応者：Jason Feehily 氏 (Head-Asia Business Centre, Business Engagement and Innovation Services)

- ・海外拠点は、コストや利益等を考慮して設置している。月1回、個々の目標が達成されているか確認を行い、評価も行われる。
- ・本部職員と海外拠点の職員とは e-mail、テレビ会議システム、スカイプ等で意思疎通を図るとともに、大学の活動に対する理解を深め、本部職員と直接交流してもらうために、大学で研修を行っている。
- ・海外拠点での留学生獲得には、とにかく現地の人と積極的に関わり、ネットワークを広げるとともに、現地の教育制度や事情—例えば東アジアは留学は子供だけの問題ではなく、両親と話をすることが多く、それに合った話題も必要になる—を理解する必要がある。
- ・海外拠点の職員は現地の事情に精通しており、学生に対し質の高いカスタマーサービスが可能である。エージェントは英国以外の国も利用しているが、大学独自の拠点と比べるとその大学の情報を的確に伝えられるかという懸念もある。

⁴⁴ 内容は大学ホームページをまとめた。 <http://www.nottingham.ac.uk/>

5. おわりに

今回の研修報告書を通じ、英国は英国経済に貢献する留学生を戦略的に獲得しようとしている現状が見えた。国や大学レベル双方で、留学生獲得を戦略的に進めるため、ターゲットを絞り、規模や成長性等について市場（国）を分析し、自身の持つ資源や強みを打ち出し、さらには、今後大きな顧客が見込める新規の市場（国）開拓を行っている。大学の予算・人員等の資源は限られており、世界に広がるすべての顧客（学生）に対応することは現実的でなく、その限られた資源で対応しきれない場合は、専門知識を持つエージェントといった外部資源を活用している。

数値目標のみに特化しているだけではないかという当初の印象も、過去の留学生政策を学び、留学生満足度向上の取組みがうたわれていたり、インタビューでの、留学は一生を左右するので的確な情報を伝えたいという姿勢、留学生が国際経験をつめるような環境を作ろうという姿勢から、自身の誤った印象をぬぐうこともできた。

今回の調査で調べきれていない点もあり、また自身の留学生業務経験も少なく、一概には言えないが、今後、海外と人材獲得競争をしなければいけない状況において、具体的で効果的な戦略を打ち立て、それに基づいた留学生獲得を進めていくことが必須であると強く感じた。「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略」にも、これからの日本では留学生獲得において従来の「ODA」的な考え方から脱却し「攻め」の取組みが必要であると明記されている。これからも留学生獲得戦略をキーワードに、世界の動きを見守り続け、一大学職員として日本の大学にとって何ができるかを真摯に考えていきたいと思う。

謝辞

本報告書の作成及び研修を通じ、ご指導・ご助言をいただいた日本学術振興会ロンドン研究連絡センターの平松幸三センター長、松本秀幸副センター長をはじめセンターの皆様、そして、この2年間の研修を支えてくださった日本学術振興会及び名古屋工業大学のすべての方々にこの場を借りて感謝と御礼を申し上げます。

※ホームページのアクセス日はすべて2014年2月27日である。